

今

活躍中の同窓生

鹿島石油株式会社 代表取締役社長 竹内 敬三氏 (S47 化工)

「先進国として恥じない、 品格ある日本に」

長引く内需減退で構造不況にあえぐ石油業界。温暖化対策やライフスタイルの変化などにより、ガソリンなど石油製品の国内需要は、ピークだった 1999 年度の 2.46 億キロリットルから 2011 年度には 1.97 億キロリットルと約 2 割減少し、国内需要の減少に苦しむ石油元売り各社は、業界再編と収益構造の転換を急いでいる。業界最大手の JX 日鉱日石エネルギーは 33% の精製能力をカットする計画を発表、各社もそれを追従する模様だ。しかし、JX グループ・鹿島石油株式会社の竹内敬三社長は、これらの動きに警鐘を鳴らす一人だ。「減らすだけでなく、競争力を付けて外に出ることを考えよ」と語る竹内氏に日本のエネルギーの今後を見据えたお話を伺った。

インタビュー 2013.2.4 鹿島石油株式会社 鹿島製油所にて



その時々を楽しんで

—— 竹内社長は日本石油に入社されたのですね。

竹内 1972 年に化学工学科を卒業、日本石油に入社して、最初の 2 年間は根岸製油所の運転現場で新しい装置の建設から試運転に携わりました。その後、本社に 6 年間、それから室蘭製油所に移り、初めの 2 年間は、世界初と言われたアスファルトを脱硫する減圧残油脱硫装置 (Vacuum Residue Desulfurization: VRDS) を造りました。今振り返ってみても、世界で 1 基しか作っていません (笑)。それで終わってしまったんですね。その後はガソリンの製造現場で 3 年間仕事をしました。

—— 室蘭は気候も厳しいですし、ご苦労されたのでしょうかね。

竹内 仕事は忙しかったので、夜の 10 時前に家

に帰ったことはありませんが、近いですから 10 分で着いてしまいます。国立公園の中にいるようなものですから、自然を相手にエンジョイできました。冬はスキーやスケートをして、5 月の連休ぐらいには雪も消えますから、ワカサギをタモですくったり、産卵で製油所の岸壁に上がってきた毛ガニを捕まえたり、山で竹の子やワラビを採ったり、秋にはキノコを採ったりします。ウエットスーツを着て海に潜ったりもしました。自然と親しむことを心掛ければ、あそこでしか味わえないものがあります。

その後、また根岸製油所でガソリン製造装置を新設するというので 2 年間、建設から運転までやり、その後は根岸製油所の生産管理を 2 年やりました。

—— どんなお仕事ですか。

竹内 原油をどの装置にかけて、どういうオペレーションをさせて、どういう製品を作るのか計画する立場でした。前任者から教わったやり方でレポート



●プロフィール

たけうち けいぞう:1948年, 神奈川
県生まれ。72年, 日本石油精製株式会社。根岸製油所, 室蘭製油所などの現場と本社勤務を経て2004年, 水島製油所長。05年, 常務取締役執行役員。10年, JX日鉱日石エネルギー(株)取締役副社長執行役員。11年, 鹿島石油(株)代表取締役社長を兼務。12年より現職。

を挙げるのですが, そのたびに上司から怒られました(笑)。半年ぐらい毎日怒られて, もういいから自分が思うようにしようと思い直して, 「こういうオペレーションを組むと面白いはずだ」と書いてみました。すると, 今度は「Very Good」という評価です。

こうなると, 毎日のようにアイデアが出ました。例えば, 輸入重油をそのまま販売せずに, 一度処理して貴重な留分だけ取ってから販売した方がいいのではないかと提案すると, すぐ実行させてもらえました。当時は係長でしたが, いいアイデアを出せば, 大きな製油所が動くのだと, 大変面白かったです。実はきちんと支えてくれる素晴らしい上司がいたからだということは, あとで分かったのですが。

根岸の後は本社で12年。その後, 水島には所長で行って, 4年。また本社に戻って, 製油所関係を全部担当する常務を2年間務めました。

2010年に合併になり, JX日鉱日石エネルギーの副社長になりました。研究開発と製造と製品の品質保証関係を統括する仕事を2年間やった後, 鹿島専任の社長となったのです。

—— 鹿島石油の役割を教えてください。



下ハカイマップ川上流で竹の子狩り(1984年)

竹内 鹿島石油は、鹿島コンビナートに立地するJX エネルギーグループの中の一つの製油所です。高度成長期には、需要が旺盛な京浜地区や京阪神などにコンビナートを造り、経済発展してきました。それが効率的だったのです。高度な文明社会では、二次産業は外に出て、人口集中地域には先進国が主導すべき産業が集積するというのが方向性です。今後は鹿島のように、需要地から少し離れたコンビナートが重要になると考えています。日本にも、人口集中地域と過疎地があるわけですから、過疎地できっちり工業を支えて、日本が違う形で世界をリードできる基礎を作らなければなりません。

—— これだけの設備を抱えると、安全管理にも神経を使われることと思います。

竹内 やるべきことをきちんと整理すると、どれが抜けているのかわかります。業務を標準化して、トレーサビリティのある、誰に聞かれても分かるような仕事の仕方をする。これを組織で徹底することに尽きると考えています。



国際商品である石油製品

—— JX グループは新日本石油グループと新日鉱グループが一つになってできましたし、それぞれに合併の歴史があったわけですが、石油業界には大変合併が多いですね。

竹内 もともと日本の石油の元売りは十数社ありました。ところが、2000年ごろに国内の石油需要のピークが終わり、減少を始めました。

—— 十数社もあったのですか。

竹内 昭和石油、シェル石油、大協石油、丸善石油、エッソ石油、モービル石油、東燃、ゼネラル石油など、いろいろありました。元売りが多すぎたのですが、経済産業省の割り当てで、生産量にも制限があったので、問題はありませんでした。ところが規制緩和されてくると、十数社でマーケットを分け合ったのではやりきれないと、だんだん合併が進んできたのです。

JX グループは2010年の発足です。規制緩和だけでなく、需要が落ちていくことははっきりしていたので、合併して、管理組織や設備をスリム化したわけです。

今から20年以上前、日本が輝いていたころ、東南アジアでの石油需要は日本ばかりだったので、石油精製業は日本の製油所が日本の国内に品物を供給するというビジネスで成り立っていました。ところが、その後、発展途上国と呼ばれていたところが急速な経済発展を遂げました。例えば、当時日本の半分ぐらいだった中国の需要は、今や日本の倍以上あります。インド、ベトナム、タイ、みんな増えました。それを供給するために海外ではどんどん製油所を作っていますが、日本ではどんどん減らしています。私はここでちょっと一呼吸すべきだと思います。

石油製品は国際商品です。日本向けだけを考えていればいい時代から、そうではない時代に移ったと思うのです。海外から入ってきて当たり前、海外に売りに行っても当たり前です。ビジネスとして成り立つかどうかは、どちらが強いからです。どちらが省エネを進められているか、企業間連携を進め、コンビナートの効率化ができていくか、これで勝ち負けが決まります。発展途上国の方が規模は大きいのですが、管理技術などはやはり先進国の日本の方



が勝っています。

—— 発展途上国も、それぞれ自前で作っているのですか。

竹内 国営のところもあります。例えば中国にガソリンや軽油を売るといって、許可制だったりして、難しい面もあります。しかし、マーケットが大きく広がっているのは事実です。需要が落ちたから製造能力を減らそうとするだけでなく、競争力を付けて外に出ていくことも考えるべきだと思います。

先進国として品格のある日本に

—— 3.11以降、日本のエネルギー問題が一気に噴き出てきた感がありますね。

竹内 エネルギーを今後どうするかは、大変難しい問題です。工業が温暖化の主要因なのかどうか、実は分かっていない。1億年後に見てみたら、人類が出している炭酸ガスの影響は本当は微々たるものだったと分かるのかもしれませんが、ともあれ、今は少しでも炭酸ガスが少ないエネルギーで、人類として快適な生活ができる方向を目指すということだと思います。

化石燃料は炭素と水素を燃やすわけですから、

多かれ少なかれ必ずCO₂は出てきます。大局的に見れば、早く炭酸ガスの固定を実現させていくのが、正しい方向だと思います。これまで化石燃料が工業を支えてきたのに、今の時点で化石燃料を悪だと言うのは、先進国のエゴだと思います。先に化石燃料を使って快適な社会をつくり上げておいて、発展途上国に「おれたちの轍を踏むな」と言っても、彼らに原始生活を強いるようなものです。「使うのをやめろ」と言うのではなくて、使っても大丈夫なように、炭酸ガスをコントロールするのが、先進国の使命だと思います。

—— そういう状況の中で、石油業界はどこへ向かうのでしょうか。

竹内 同じ炭酸ガスでエネルギーをたくさん回収するために、効率よく省エネを進め、少ないエネルギーで製品を供給できるようにする。これが石油精製業の責務だと思っています。

実は今、日本の石油系の火力発電所の4割近くは、原油を使っています。私は、これは罪だと思います。

—— なるほど。原油は他に利用価値が高いですからね。

竹内 石油を使うなどと言っているのではありません。しかし、原油にはガソリン、灯油、LPG、軽油、重油が混ざっています。ガソリンは自動車に使えるし、ジェットはジェット機を飛ばせる、軽油はトラックを動かせる。使うときには、技術をそこに集積して、貴重なものを取り出した後、残った重油で発電すべきです。正直な話、原油で発電するのは、国賊ではならぬ人類賊だと思います。先進国として恥じない、品格のある日本にするために、考え直す必要があります。

—— 原油を使った方が安上がりなのですか。

竹内 発電所の設備がコンパクトにできます。環境対応を取らなくてもいいのです。しかし、環境立国の日本でしょう。そんなことでいいのかと思います。

これからも、ガソリンや軽油は、移動用の燃料として重要な地位を占めると 생각합니다。ジェット燃料も必要だと思います。この三つをなくして何かに代替しようとする前に、もう少しやるべきことがあると思います。

核融合か何かで、全く違った技術が確立されれば別ですが、あとたぶん100年ぐらいは、移動用



燃料と石油化学の原料は必要だと思います。今、出てきているシェールガスで、エチレンの供給はできるようになると思いますが、芳香族は、やはりナフサから作らざるを得ないのです。ぼっと燃やせば動いてしまうという安易な使い方ではなく、一つ一つの留分の重要性をわきまえて、貴重な使い方(noble use)をするのが大切です。

—— 電気自動車についてはどう思われますか。

竹内 化石燃料ではなく、違うものから電気が安価にできる時代を想定して電気自動車は開発した方がいいでしょう。しかし、今は化石燃料で発電しているのに、電気自動車に乗っている人が「おれは世のためにこれに乗っている」というのはナンセンスですね。

—— 震災以降、発電が変わってしまったことも大きいですね。

竹内 原子力の問題をどうとらえるかです。あれだけの事故を起こしたのに、反省がなさすぎると思っています。人が住めなくなるというのに、電気料金が上がるから稼働せよとは、一体何を言っているのかと思います。

実は私は、原子力は国のエネルギーセキュリティのために必要なので稼働させるべきだと思います。経済論でやってしまうと、ああいう悲劇

がまた起きかねません。新しい原子力発電所を認めるけれども、安全対策は、今までの何倍もやる。でも、それで事故が起きないのかというと、事故は起きます。

—— どのような手を打っても、必ず起きますね。

竹内 技術屋としては、絶対なんてあり得ません。自分たちの持っている知識の中で、管理技術の中で精いっぱいやっているのだけれど、起きてしまう。原子力だけが違っているとは思えません。それならば、いざとなったときにすべてを失ってもいいから、放射能を閉じ込めるだけの安全対策はどんなに金がかかってでもやるべきです。

日本だけがやめてもいいですが、韓国や中国でも原子力発電をやっているのです。影響を受けることもあるかもしれません。事故の可能性を前提として技術的なアドバイスをするのも、やはり先進国の品格のような気がします。

—— 釜山の辺りの原子力発電所から海底電線で電気を引っ張ってこようという案がありますが、とんでもないことですね。

竹内 かつては世界で2番の経済国だった日本ですから、技術で世界をリードするという気概を持つべきです。何もしないでいい思いをしようというのは、まずいのではないかと思います。

やりたいことを我慢しない

—— ありがとうございます。ところで、学生時代はどのように過ごされていましたか。

竹内 先ほど化学工学科を卒業したと言いましたが、むしろ柔道部を卒業したと言った方がいいかもしれません（笑）。大学の先生には申し訳なかったのですが、あまり勉強せずに、まじめに柔道をやっていました。

—— 段を持っていらっしゃるのですか。

竹内 4段です。20年ぐらい前までは大学へ行ってやっていたのですが、現役に投げられて骨折しそうになって以来、家族に強く止められて、道着は着ないと決めました。きれいな道着はまだとってありますけれどね（笑）。

学部の仲間とはまた別の、年代を超えた仲間と付き合えるのも運動部のいいところですね。柔道部の1級下の後輩が日本鉱業に入りまして、時々会って飲んでいたのですが、今、彼はJX日鉱日石金属の方の副社長をやっています。まさか同じJXグループになるとは思いませんでした。会議で一緒になったりして、面白いものだねと言っています。

—— ほかに多彩な趣味をお持ちですか。

竹内 柔道をやめたので、音楽に切り替えて、テナーサックスを根岸製油所の頃から二十数年吹いています。昔キャバレーでトランペットを吹いていたという同僚に、毎日昼休みに教えてもらっているうちに、いろいろ仲間が集まってきました。ドラムス、ギター、ベース、ピアノが集まって、ピックバンドと一緒にになりました。ピックバンドは楽です。難しい



倉敷ロータリークラブでのテナーサックス演奏



ところは吹かなくてもわからない（笑）。

—— どんなところで演奏されたのですか。

竹内 根岸時代は、横浜ジャズフェスティバルにプロバンドで出ていました。あとは製油所のサマーフェスティバルとか。水島に転勤になり、その仲間からは外れてしまったのですが、今度は倉敷のロータリークラブのバンドに参加して、ロータリークラブの宴会や、老人ホームの慰問などに行って演奏しました。そういう意味では、ただ製油所の所長だけをやるのとは、全然違う人間関係が築けました。

—— なるほど、そんな竹内社長が学生に向けて一番言いたいことはなんですか。

竹内 学問でも趣味でもいいのですが、これがやりたいと思ったら、その瞬間を大切にトライして下さい。我慢してはいけません。興味というのは、環境でどんどん変わります。そのときに自分を抑えて後回しにすると、結局長い人生で、何もやらないで終わってしまいます。これは学生だけではなく、みんなに言えることだと思います。

—— 貴重なメッセージですね。本日はありがとうございました。

インタビューア：坪田 賢亮 (S43 金 S45 修金)

文：秋庭 紀子

写真撮影：谷山 實